

こめ、ひと、まわる、100年先も。

▽就農、期待と漠然とした不安

私は、現在住んでいる奥州市胆沢若柳（当時は胆沢郡胆沢町若柳）で兼業農家の二女として生まれました。

父はサラリーマンで、農業は母と祖母が従事し、私は地元の普通高校に通っていましたが、二人姉妹の姉が嫁いでいったので、残った私が農業を継ぐのだろうか、ほんやりと将来を描きながら、昭和58年、近くの県立農業短期大学校に入学しました。

入学すると、私と違って農家を継ぐ意識の高い、熱い学生ばかりがいて、私も「やっぱり農業って悪くないな…」と思うようになりました。卒業後は2年ほどアルバイトをしてお金を貯め、ビニールハウスを購入し野菜や花卉栽培をはじめました。

その頃の農業は米の値段がどんどん安くなっていった時代で、収入も不安定で、農家を継

ぐ人も減り始めており、どうにかして元の収入に戻したいという気持ちでビニールハウスを購入しました。そして、自分の家で作った米、野菜で食べることに困らない、そんな農業の豊かさを感じて育った私には、農家を離れていく周りの姿を見て、このまま農業がなくなってもいいのだろうか、生きていけるのだろうかといった漠然とした不安を持ちながら農業に従事していました。

やがて、親と同じようにサラリーマンの男性と結婚し子供も生まれてくると、当時は温暖化の問題がクローズアップされてきた頃でしたが、周りを見渡せば休耕田が増えるなど、このままでもいいのだろうかといった不安が一層、漠然としたまま膨らんできていました。

やがて、親と同じようにサラリーマンの男性と結婚し子供も生まれてくると、当時は温暖化の問題がクローズアップされてきた頃でしたが、周りを見渡せば休耕田が増えるなど、このままでもいいのだろうかといった不安が一層、漠然としたまま膨らんできていました。

▽欧州視察と農業者アカデミー入学

平成10年、そんな不安をいろんなところで

話していた私に、県が主催するグリーンツーリズムに関する欧州視察の話が舞い込んできました。

そして向かった先のドイツの農村で見た民泊農家は、とてもきれいで、シンプルで、豊かさにあふれていました。聞くと、「泥がたまり汚かった沼をきれいにし、畜産からリンゴ栽培に転換、家をリフォームして民泊を始めた」とのこと。でも、よくよく考えると、それって私の家と同じで私も出来そうだし……。そう考えると、「このままではダメだ。何かしなくちゃ」といった思いが一層高まり、平成12年には自宅を改装し「農村民泊まよごや（馬屋小屋）」をスタートさせるとともに、とにかく一人じゃできない、仲間を作ろうと、私と同じ子育て中のおかあさんたちを集め「わがママ倶楽部」を立ち上げ、思いを伝える活動を始めました。

また同じころ、旧胆沢町では将来の町の農業や農村を考える「農業者アカデミー」を開



♪kim♪My夢♪Oshu♪
(マイムマイム奥州)
代表

及川 久仁江

講しており、仲間とともに入学しました。そこで東北大や東大の先生方が中心となり、循環型農業を目指す取り組みが語られており、アカデミーでの2年間の学びで「そうだ、私の不安の根っこにあるものはこのことだったんだ」と腹落ちし、「地球を守りたい。そしてそのために農村に生きる私は、農業を通してシンプルに生き、そのシンプルな良さをアピールする」と決めました。

そして卒業後は、農家レストラン「まだ来すた」、菓子工房「おやつ屋」をオープンさせ、循環型農業で作った食事やおやつ、総菜などを、地域の方やグリーンツーリズムで訪れる方々に提供することで、農村の良さを理解していただくことに努めました。そうすると活動を通して私たちの意識も変わり、次第に自信のようなものが出来てきました…。「わがママ」ではなく、「あるがまま」でいいと。

▽マイムマイム奥州の発足

こうした循環型農業づくりの輪の中にいた4つの事業者が中心となり、組織立って外に向けて発信していこうと平成24年に立ち上げたのが「マイムマイム奥州」です。

休耕田を耕し無農薬、減農薬米の生産に取り組む「農事組合法人アグリ笹森」組合長の織田義信さん、その米を発酵させてエタノール、石鹸、化粧品雑貨などを製造販売する東京から来た「株式会社ファーマンステーション

ン」の代表取締役酒井里奈さん、その発酵させた米の粕を餌にして地元黒石の山の中で平飼する鶏の卵を販売する「まっちゃん農園」の代表取締役松本崇さん、そして、鶏糞を肥料に栽培した米と野菜、米は減農薬で稲のみ殻でふっくら炊いて、滋味深く優しい味が評判の「まっちゃん卵」をかけたご飯を提供



マイムマイム奥州の仲間たち

する私、の4人をはじめとした「農村における循環型社会の構築と、農村と都市の人、暮らし、文化が交流する場づくり、コミュニティづくり」を目指すプロジェクト集団です。事務局はファーマンステーションさんに担当いただいております。

▽「私の100年計画」

平成14年、農業者アカデミーの卒業論文として、就農してからずっと考えてきたことを今後実践する計画として描いたのが、「自然にできるだけ逆らわず、みんなであるがままに生きていけば、私の孫、ひ孫、玄孫の代まで楽しい地球であり続ける、そのことを次の世代にも伝え、100年先まで繋げる、私の100年計画」です。

平成28年3月、東京の国連大学で行われた「持続可能な開発目標(SDGs)と地域のパートナーシップ」での座談会に出席し、マイムマイム奥州の活動について発表しましたが、席上100年計画にも触れ、「私よりずっと若いマイムマイム奥州の仲間と出会い、計画にある『伝える』という目的は達成したから、もう死んでもいい」と発言し、大きな笑いとともに拍手をいただきました。

やっとそういった人たちと出会えた。そして続けることの大切さを教えてくれた素晴らしい仲間たちに感謝し、これからも交流の輪、循環の輪を楽しく広げてまいります。